

「防災環境都市・仙台」という言葉を初めて聞いた時、私は堅苦しきを感じ、また、一介の高校生である私からは縁遠い話題のような気がして関心もあまり強くは持てなかった。今回、顧問の勧めや友人からの誘いもあり、仙台防災枠組みについての講演や実際に行われている地域防災の例も拝聴したが、大まかな概要以外まだよく理解できていない。

しかし当初感じていたような親しみにくさは幾分か和らぎ、また地域防災には専門的な知見のみならず、むしろ女性や学生などの斬新な視点が大切になってくるということを知り、だんだんと興味が湧いてきた。特に人材育成やステークホルダーの確保など人に焦点を合わせた取組に非常に魅力を感じた。ただセミナーに参加し私が一番に感じたのは、なぜこのような取組が行われていたことを知らなかったのだろうということだ。私の周囲を見渡しても、「防災環境都市・仙台」という言葉が浸透しているようには感じられない。実際、私も今回の機会がなければ、この取組について何も知らず興味も持たないまま大人になっていただろうと思う。私自身の今までの経験を振り返っても、防災の意識を高める取組として避難訓練以外の取組をした覚えがなく、防災に関して現在行われている施策についても関心を持って情報を得ようとしたことがない。どんなに優れた防災の取組を行っていても、それが広く普及され大勢の人にとって運用、実用できるものでなければその効果は十分に発揮されないと私は思う。「防災環境都市・仙台」という理念は今後も継続されるべきものであるからこそ、防災への関心が高い人々ばかりではなく私のように防災への意識が高くない人々、その中でも特に未来を担う世代に働きかけを強め、仙台の防災についての取組を認知してもらうことが必要ではないだろうか。そのためには、教育機関や地域で行われる防災の取組に多様性を出したり、授業の中で、社会において実際に行われている取組について紹介したりするなど、啓発活動をより活発化させることが不可欠だと私は考える。「防災環境都市・仙台」の真の意味での実現とは市民一人一人の間に防災の意識が根付くことだと思う。